

与那国島で採集した考古資料

仲 座 久 宜・羽 方 誠

Archaeological resource collected on Yonagunijima Island

Hisayoshi NAKAZA and Makoto HAKATA

与那国島総合調査報告書、沖縄県立博物館・美術館 別刷

2009年3月30日

Reprinted from Survey Reports on Natural History, History and Culture of
Yonagunijima Island, Okinawa Prefectural Museum and Art Museum

March, 2009

与那国島で採集した考古資料

仲 座 久 宜*・羽 方 誠**

Archaeological resource collected on Yonagunijima Island

Hisayoshi NAKAZA* and Makoto HAKATA**

はじめに

与那国島では、これまでに実施された分布調査や開発に伴う緊急調査により、現時点で20ヶ所の遺跡が周知されている(図1・表1)。この数値は、1979年に教育庁文化課が実施した分布調査時の遺跡数及び、前回の与那国島総合調査時から4ヶ所増加している(沖縄県教委, 1980; 知念, 1989)。この内、緊急調査が実施された遺跡の数は5遺跡に及び、3ヶ所の遺跡は、各種開発に伴う詳細分布調査や試掘調査により発見されたものである。このように、与那国島でも開発の勢いは衰えるところを知らず、環境の改変は今日も続いている状況にある(表2)。

このような状況下で、従前の分布調査時から遺跡の所在する環境も刻々と変化していることが想定されたため、今回の調査では、これまで報告されてきた分布調査成果を基に現地踏査を行い、遺跡の現状を確認するとともに、地表に散布する遺物を採集し、報告することを目的とした。

調査期間は、仲座が2004年12月20日～22日及び、2006年3月7日～10日の日程で行い延べ日数6日を要し、羽方が2008年3月4日～6日までの3日間で行った。しかし、那覇からの移動に時間が割かれる上に天候不良も相まって、目的としていた周知の遺跡すべてを踏査することはできなかった。そこで

今回の報告は、与那国島におけるこれまでの調査・研究史をふり振り返りつつ、踏査により得られた特徴的な遺物及び、調査中に現地の方々の協力により得られた資料を紹介し、次に沖縄県立博物館・美術館が所蔵するジョージ H・ケアが与那国島で採集した資料をまとめ、報告としたい。

なお、本報告の執筆は、調査史及びジョージ H・ケア採集資料について羽方が担当し、その他の項目は仲座が執筆した。また、現地調査に際しては比川在の後間正輝氏に協力していただき、資料閲覧に際しては入福浜太郎氏にお世話になった。遺物の写真撮影及び図版作成は、矢舟章浩氏、岸本竹美氏、大堀浩平氏、野村知子氏に依頼した。記して感謝申し上げたい。

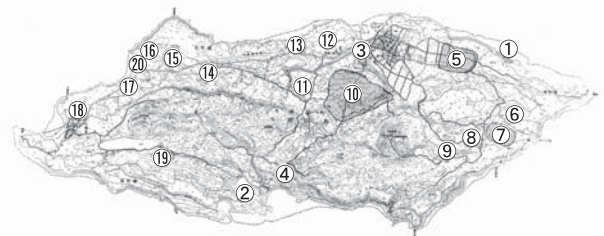


図1 与那国島の遺跡分布(番号①～⑳は表1に対応)

※ 〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7 沖縄県立埋蔵文化財センター

※※ 〒900-0006 沖縄県那覇市おもろまち3-1-1 沖縄県立博物館・美術館

* Okinawa Prefectural Archaeological Center, 193-7, Vebaru, Nishihara, Nakagami, Okinawa 903-0125, Japan

** Okinawa Prefectural Museum and Art Museum, 3-1-1, Omoromachi, Naha, Okinawa 900-0006, Japan

表1 与那国島の遺跡一覧

№	遺跡名	時代 時期（年代）※1	調査年 ※2	主な遺構	主な遺物	現 況
1	大泊浜貝塚	先史時代 無土器期か	—	—	焼土、螺蓋製品、自然遺物（貝・骨）	海岸砂丘
2	上里遺跡	歴（原）史時代 中森期か	—	—	輸入陶磁器、カムイヤキ、土器等	畑地
3	島仲橋遺跡 （祖納遺跡）	先史～歴（原）史時代か	—	—	外耳土器、輸入陶磁器、人骨	集落
4	西真嘉遺跡	歴（原）史時代	—	石積み	輸入陶磁器、土器	山林
5	浦野遺跡	歴（原）史時代	—	—	沖縄産陶器、輸入陶磁器	畑地
6	ナガト遺跡	歴（原）史時代	—	—	輸入陶磁器、カムイヤキ、土器	牧場・畑地
7	ンダン遺跡	歴（原）史時代	—	—	輸入陶磁器、カムイヤキ、土器	拝所・牧場
8	与那原遺跡	歴（原）史時代 新里村期～中森期（14～16世紀）	1982～1984・1986	柱穴跡、排水溝跡	輸入陶磁器、カムイヤキ、土器、石器、鉄製品等	畑地・牧場
9	ヤマトバカ遺跡 （大和墓、八嶋墓）	歴（原）史時代 中森期～パナリ期か	1964	墓	輸入陶磁器、土器、人骨	山林
10	島仲村跡遺跡	歴（原）史時代 中森期～パナリ期	2000	墓、溝状遺構	輸入陶磁器、カムイヤキ、土器、石器、鉄製品等	畑地
11	嘉田地区古墓群	歴（原）史時代 中森期～パナリ期（17～20世紀）	2002	墓	輸入陶磁器、カムイヤキ、土器、石器、金属製品等	畑地
12	潮原古墓群	歴（原）史時代 中森期～パナリ期（17～20世紀）	2004～2005	墓	沖縄産陶器、輸入陶磁器、金属製品、人骨等	空港
13	トゥグル浜遺跡	先史時代 無土器期	1983・1997	—	石器、貝製品、骨製品、自然遺物	空港
14	トゥグル遺跡	歴（原）史時代 中森期～パナリ期か	—	—	輸入陶磁器、土器	牧場・原野
15	サンバル村跡遺跡	歴（原）史時代	—	—	輸入陶磁器、土器	牧場
16	桃原遺跡	歴（原）史時代 中森期～パナリ期か	—	—	土器	原野
17	伝ダンノアジ屋敷跡遺跡	歴（原）史時代	—	石積み	—	原野
18	慶田崎遺跡	歴（原）史時代 中森期（14～16世紀初頭）	1985	—	輸入陶磁器、カムイヤキ、土器、自然遺物	久部良小学校
19	伝サガムトゥ村跡遺跡	歴（原）史時代	—	—	輸入陶磁器、土器、鉄滓	牧場・原野
20	ダンノ浜	歴（原）史時代 パナリ期か	1997	石組み炉	タカラガイ	海岸砂丘

※1 時代・時期名は石垣市2007による。

※2 「調査年」は、発掘・試掘が行われた年である。

与那国島の考古学調査・研究史

与那国島における考古学調査・研究の歴史を振り返るに当たり、大和墓の踏査が中心となる「戦前の調査」、学術・分布調査のための踏査・試掘が中心となる「戦後の調査Ⅰ」、開発工事に先立って行われる発掘が中心となる「戦後の調査Ⅱ」に分けて記述する。

戦前の調査

与那国島における遺跡の調査は、明治時代に始まる。鹿児島県出身の植物学者、田代安定は1887（明治20）年に与那国島を訪れて、大和墓について論じている（田代、1890）。

1893年に与那国島を訪れた青森県出身の笹森儀助によるものである。笹森儀助は4日間の滞在期間中に、八嶋墓（大和墓）を訪れて被葬者を弔う祭文を納めるとともに、壺・棺（骨壺か）の破片を採取したことを、絵図とともに記している（笹森1894）。

戦後の調査Ⅰ

1959（昭和34）年に高宮廣衛が遺跡分布調査を行った結果、新たに島仲橋遺跡、島仲部落跡、与那原遺跡、裏野遺跡を発見した（多和田1960）。

1960年に國分直一、金子エリカは兼久地区、島仲地区の仲間ドネ、髯内地区ウイザトの3か所で試掘を行い、桃原の崖葬などの踏査を行った。桃原の崖葬からは抜歯の跡が残る頭骨が採集された（國分1972）。

1960～1962年にかけて、ジョージ H. ケアは島内の8ヶ所で調査を行った（沖縄県博1982）。

1964年に永井昌文・佐野一は大和墓など3ヶ所で調査を行い、人骨や出土品について考察している（永井・佐野1966）。

1971年に沖縄大学沖縄学生文化協会考古班は分布調査を行い、新たに慶田崎遺跡、トゥグル遺跡、上里遺跡を発見した（沖縄大学、1971）。

1976・77年に沖縄県教育委員会がおこなった分布調査では、新たに西真嘉遺跡、トゥグル浜遺跡が発見された（沖縄県教委、1977）。

1979・80年に沖縄県教育委員会が行った分布調査の結果、新たに大泊浜貝塚、サンバル村跡遺跡、伝

ダンノアジ屋敷跡遺跡、伝サガムトゥ村跡遺跡が発見された（沖縄県教委、1980）。

1982～1984年にかけて青山学院大学の三上次男らは、与那原遺跡の調査を行った（与那国町教委、1988）。

戦後の調査Ⅱ

1983年に調査されたトゥグル浜遺跡は、与那国島で初めて調査された先史時代無土器期の遺跡であった。この調査は島内における開発工事に伴う緊急発掘調査の先駆けともなった（与那国町教委、1985）。

1985年、与那国町教育委員会は久部良小学校体育館建設に先立ち、慶田崎遺跡を発掘調査した（与那国町教委、1986）。

1986～1987年、与那国町教育委員会は農地改良等に伴い与那原遺跡の発掘調査を行った。その結果、建物の柱跡や鍛冶関連遺物が見つかった。また同時に行った分布調査により、新たにندان遺跡、ナガト遺跡を発見した（与那国町教委、1988）。

1997年に沖縄県教育委員会は、与那国空港周辺遺跡の分布調査を行い、新たにダンノ浜、桃原遺跡の2遺跡を発見した（沖縄県教委、2000）。

2002年には、圃場整備に先立ち嘉田地区古墓群の発掘が行われ、33基の墓が調査された。また島内における大規模な墓の調査の先駆けとなった（沖縄県埋文、2004）。

2004年に田原川の壕など8か所が、戦争遺跡として調査された（沖縄県埋文、2006）。

2004～2005年に与那国空港拡張工事に先立ち、潮原古墓群が調査された（沖縄県埋文、2006）。

採集資料の紹介

大泊浜貝塚

大泊浜貝塚は、過去の分布調査において帯状の黒色砂層及び自然遺物が確認されており、無土器期の可能性がある遺跡として報告されている（沖縄県教委1980）。遺跡は祖納集落の東約3.5km、東端の東崎へ至る途中で牧場を北に抜け、急峻な道を下ると北側海岸沿いの砂丘地に立地している（写真7）。その後背は採砂工事により抉られ、雨水が溜まる。

今回の調査では、風雨及び高波により崩落したと

表2 与那国島の考古学調査史

№	調査年	遺跡名・調査地名	調査目的・方法	調査主体	文献
1	1887	大和墓	学術調査 踏査	田代安定	田代1890
2	1893	八嶋墓（大和墓）	学術調査 踏査	笹森儀助	笹森1894
3	1958・1959	島仲橋遺跡、島仲部落跡、与那原遺跡、裏野遺跡	分布調査 踏査	多和田真淳 高宮廣衛	多和田1960
4	1960	祖納島仲地区、仲間ドネ、ウイザト、桃原ほか	学術調査 試掘、踏査	國分直一	國分1972
5	1960～1962	ダンガほか	学術調査 踏査	ジョージ H. ケア	沖縄県博 1982
6	1964	大和墓、樽舞崖墓、祖納島仲地区	学術調査 試掘、踏査	永井昌文 佐野 一	永井、佐野 1966
7	1971	上里遺跡ほか	分布調査 踏査	沖縄大学沖縄学生文化 協会 考古班	沖縄大学 1971
8	1976～1977	慶田崎遺跡ほか	分布調査 踏査	沖縄県教育委員会	沖縄県教委 1977
9	1979～1980	大泊浜貝塚ほか	分布調査 踏査	沖縄県教育委員会	沖縄県教委 1980
10	1982～1984	与那原遺跡	学術調査 試掘	青山学院大学	与那国町教 委1988
11	1983	トゥグル浜遺跡	緊急調査 発掘	沖縄県教育委員会	沖縄県教委1 985
12	1985	慶田崎遺跡	緊急調査 発掘	与那国町教育委員会	与那国町教 委1986
13	1986	与那原遺跡、ナガト遺跡、ンダン遺跡	緊急調査 発掘 分布調査 踏査	与那国町教育委員会	与那国町教 委1988
14	1988	浦野遺跡ほか	分布調査 踏査	沖縄県立博物館	知念1989
15	1989～1994	ンダン遺跡ほか	分布調査 踏査	沖縄県教育委員会	沖縄県教委 1994
16	1997	トゥグル浜遺跡、サンバル村跡、ダンノ浜、桃原遺跡	分布調査 試掘、踏査	沖縄県教育委員会	沖縄県教委 2000
17	2000	島仲村跡遺跡	分布調査 試掘、踏査	与那国町教育委員会	与那国町教 委2002
18	2002	嘉田地区古墓群	緊急調査 発掘	沖縄県立埋蔵文化財 センター	沖縄県埋文 2004
19	2004	田原川の壕ほか（戦争遺跡）	分布調査 踏査	沖縄県立埋蔵文化財 センター	沖縄県埋文 2006
20	2004～2005	潮原古墓群	緊急調査 発掘	沖縄県立埋蔵文化財 センター	沖縄県埋文 2006
21	2004・2006・2008	大泊浜貝塚ほか	分布調査 踏査	沖縄県立博物館、沖縄 県立博物館・美術館	仲座・羽方 2009



写真1 浦野遺跡 (図1・表1-5)
採集できる遺物はわずかである。



写真4 潮原古墓群 (図1・表1-12)
現在は与那国空港の敷地となっている。



写真2 ンダン遺跡 (図1・表1-7)
中国産陶磁器や沖縄産陶器が散乱している。



写真5 トウグル遺跡 (図1・表1-14)
中国産陶磁器や沖縄産陶器が散乱している。



写真3 島仲村跡遺跡 (図1・表1-10)
屋敷跡や井戸、古墓などが点在する。



写真6 サンバル村跡遺跡 (図1・表1-15)
遺跡の北側で石積みが確認されている。

思われる砂丘の断面に、黒色砂層及び遺物を確認することができた。黒色砂層は砂丘上部付近にレンズ状に堆積しており、この断面でのみ確認できる。砂層中にはカーボンを多く含むため、その影響で遺物も大半が黒色化している。散布する遺物は貝類が多く、被熱を受けている上に打割されているようであ

る。獣魚骨等も含まれており、ウミガメやブダイ科、カニのツメが得られている。その中に、人工遺物としてわずかにヤコウガイの螺蓋製品及び焼土状製品が確認されている。

螺蓋製品は3点が得られている(写真8-1～3)。形状は原型をほぼ保つが、薄い下縁辺を連続して剥

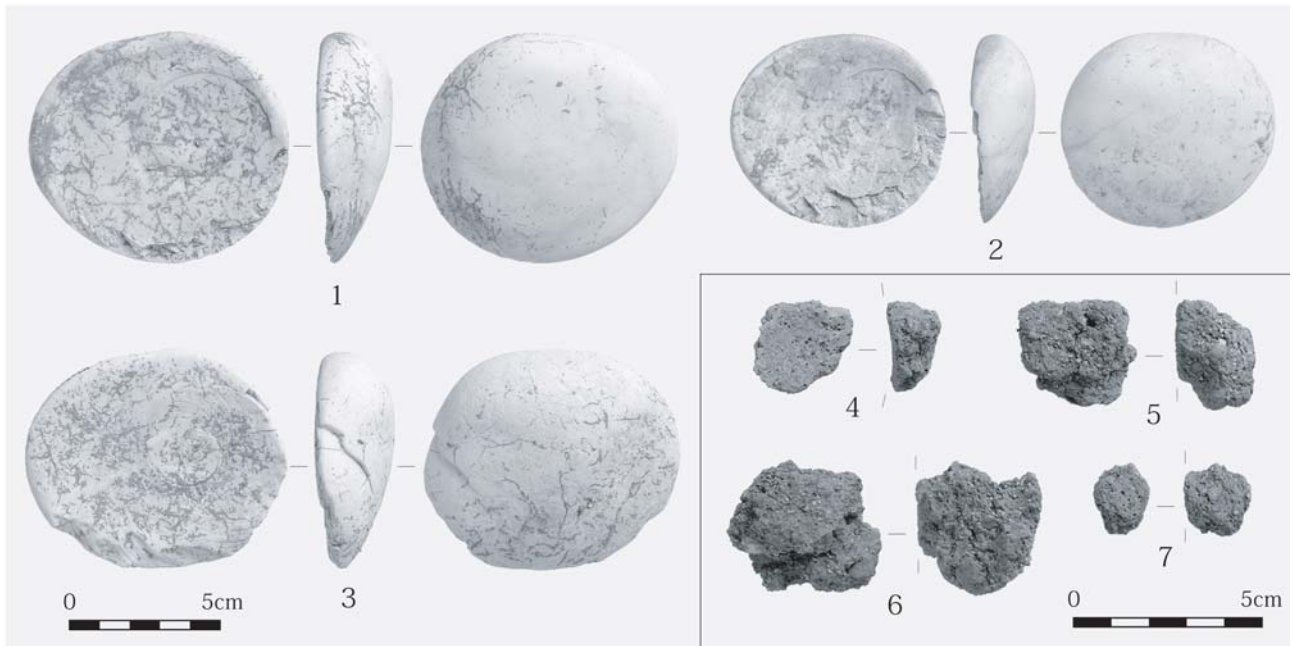


写真8 大泊浜貝塚採集遺物（1～3：螺蓋製品、4～7：焼土状製品）



写真7 大泊浜貝塚遠景

離させる搔削形とされているものである（伊藤，2000）。3点とも刃部は鋭く刃縁が円弧を描くタイプで、トゥグル浜遺跡で出土している資料と類似する（沖縄県教委，1985 a）。

次に焼土状の製品であるが、大小10点ほどが得られており、2～4 cm大の不定形で色調は橙褐色～暗灰褐色を呈する（写真8-4～7）。焼成は脆く、胎土中に有孔虫を多く含む白砂が練り込まれていること及び、調整された面を有する資料が数点含まれることから人工遺物としたものである。調整面はいずれも片面のみであることから、現時点で土器としての判断はしがたいが、今後比較資料が得られれば、その性格を特定することが可能と思われる。

上里遺跡

与那国島の南側、比川集落の西に広がる遺跡で、沖縄大学沖縄学生文化協会が1971年に発見した遺跡である（沖縄大学沖縄学生文化協会，1971）。現在は車エビ養殖場の北側に接しサトウキビ畑として耕作が行われており、畑地内には大量の陶磁器類が散布している状況が確認できる（写真9）。遺物は耕作により破砕され細片が多いが、表面採集により確認できた資料は、中国産青磁、白磁、染付、色絵、華南三彩、褐釉陶器、タイ産鉄絵のほか、土器、カムイヤキ、ガラス製玉、石器類とその種別は多い。

散布する陶磁器の年代は、14世紀後半～15世紀前半が多く、この時期を中心として当地に現比川集落の前身となる集落が存在した可能性が考えられ、遺



写真9 上里遺跡遠景

跡内に「ンディウガン」という比川集落で唯一の御嶽が鎮座することも、旧集落が存在した可能性を示唆している（沖縄県教委，1985 b）。

写真10に示した遺物は、車エビ養殖場の北側畑地より採集したもので、青磁の碗、皿及び褐釉陶器が中心である。その中でも写真10-9に示した遺物は、タイ・スコタイ産の鉄絵鉢片である。この資料は現時点で国内での出土は見られないが、町田市立博物館の展覧会図録中に類例を見ることができ、時期を15～16世紀としている（町田市立博物館，1998）。破片は胴上部付近で、器厚は5～6mm。胎土は淡褐色で白色の粒子を多く、黒色粒子を少量含みやや軟質。内外面ともに薄い白化粧を均質に施し、鉄絵が密に描かれる。内面は破片上部に雷文を簡略化したと思われる文様帯を置き、次に圏線を2重に巻いて下部に唐草様の精緻な施文がされる。外面は内面に比して間隔を広く取った唐草文が太めに表現されている。施文後に透明釉を薄くかけるが、一部でただれ白濁する。

今回採集したその他の陶磁器類に関しても、質・量ともに沖縄本島のグスク等から出土する遺物と見劣りしないほどの製品が得られており、当時の与那

国島とアジア諸国とのつながりについて考えさせる。

なお、遺跡の北東約500mの地点には西真嘉遺跡が立地しており、そこから過去の分布調査において石積み遺構が確認され、輸入陶磁器も採取されている（沖縄県教委，1980）。現在は採石場が近接しているため立ち入りができなかったが、現地では「ツイ（後）グスク」と称されていることが聞き取りにより得られており、位置的・時期的に近い上里遺跡との関連が指摘できるのではないだろうか。

祖納集落採集の開元通宝

前記した上里遺跡の調査中に、比川在の後間正輝氏に声をかけていただき、後間氏及び後間氏の親類である入福浜太郎氏が所有する文化財関係の資料を見せていただく機会を得た。その際実見した資料は、祭事に使用する器物及び、染付碗やビーズ等副葬品を撮影した写真のほか、ウニ化石類が主であった。そこで昼食までごちそうになり、食後に居間で鴨居に掲げられた賞状等の額を眺めていると、その中に米ドル札やコイン類が数種配置された額が確認できる。近づいてその内訳を確認したところ、銅銭が1点含まれており、銭文は開元通宝と判読できる。開

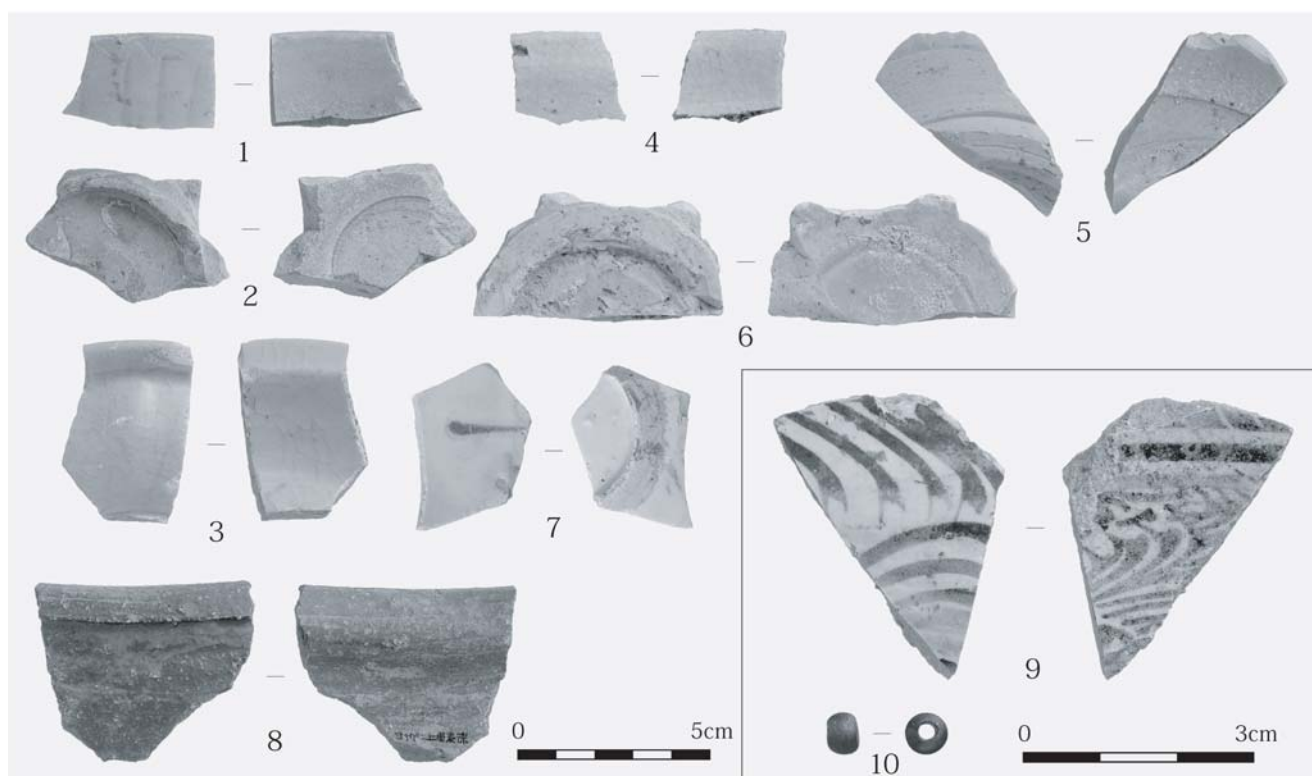


写真10 上里遺跡採集遺物

（1～3：青磁、4～6：白磁、7：染付、8：褐釉陶器、9：鉄絵陶器、10：ビーズ）



写真11 島仲橋遺跡・祖納遺跡遠景

元通宝は西暦621年に中国で初鑄された円錢である。本県からも十数遺跡で出土しているが、現時点で与那国島からの出土は確認されていない。資料を所有する入福浜氏にその出自を確認すると、1996（平成8）年頃、祖納の保健センター建設時に現場から採取したとのことであった。入福浜氏のご厚意により、現地で写真撮影及び拓本を採取させていただいた（写真12）。

この開元通宝が採集された祖納は、与那国町役場等が所在する島の中心地である。集落内には1959年に高宮廣衛により発見された島仲橋遺跡（多和田，1960）、または祖納遺跡（沖縄県教委，1977）が分布しており、遺物包含層の存在が確認されているほか、外耳土器や陶磁器類が採取されているが、遺跡は現集落下にあり、これまで発掘調査は行われていない（写真11）。

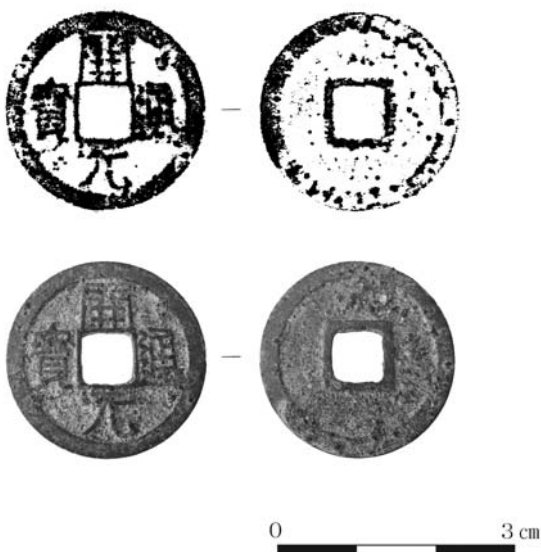


写真12 祖納採集の開元通宝

今回紹介した開元通宝は発掘調査で得られたものでないことから、層位や共伴遺物等に関する状況は不明であるが、外部から持ち込まれていることに相違はなく、今後の調査により出土する可能性がある資料としてここに紹介した。

ジョージH・ケア採集資料

採集資料の内訳は表3のとおりである。全体的な傾向を見ると、12・13世紀頃のカムィヤキや、18・19世紀頃の沖縄産陶器などはわずかで、15～17世紀頃の褐釉陶器や青磁、土器が中心となる。

つぎに地名などから採集地について検討する。「ダンガ」は、トゥグル遺跡の東側に「ダンガ」という地名があることから、トゥグル遺跡かその周辺と考えられる。「ドナンバル」は、与那原遺跡と考えられる。「ナマハマ海岸」は、久部良漁港の西側に隣接する海岸であり、現在遺跡として認識されていない。「ンーダ」は、地名「ンタグシク」（浦野遺跡内）や地名「ンダン（帆安）」（ンダン遺跡・与那原遺跡・ナガト遺跡の周辺）、御嶽名「ンディウガン」（上里遺跡内）などがあり、特定できない。「サムバル（島中廃村）」は、サンバル村跡遺跡と考えられる。「ウヤバル廃村」は、御嶽「ウヤバルウガン」がある島仲村跡遺跡と考えられる。

まとめ

以上、与那国島から採集した資料について報告を行った。

今回の執筆にあたり、与那国島の研究史・調査史を辿ることで、古くは明治期から多くの研究者により多角的な調査が行われていたことがわかる。この島がこれだけ注目されるのは、与那国島が沖縄はもとより、日本の最西端、国境の島であることにほかならず、そのことが多くの研究者の興味をかき立てたのであろう。

ここで今回の調査を集約し、まとめとしたい。大泊浜貝塚より得られた調整面を持つ焼土に関しては、その後、類例を確認するため、沖縄県立埋蔵文化財センターが所蔵する下田原貝塚出土の下田原式土器と比較観察を行った結果、混和材の点で下田原式土

表3 与那国島におけるジョージ・H・ケア採集資料一覧

№	採集地名	種類	器種	部位					合計	備考		
				口縁部	胴部	底部	口～底部	完形			不明	
1	ダンガ Danga	青磁	碗	8	16	10				34	トゥグル遺跡もしくはその周辺	
			皿	1						1		
		白磁	碗			1				1		
		褐釉陶器	壺	3	38	2				43		
			壺(タイ産)	2	15					17		
		カムイヤキ	壺		2					2		
			壺か甕		1					1		
	土器	不明		6	1				7			
	不明	不明		1					1			
		合	計	14	77	13				107		
2	ドゥナンバル Dunanbar	青磁	碗	5	3	5				13	与那原遺跡	
				皿	1					1		
				香炉		1				1		
		白磁	碗	1	1	1				3		
			褐釉陶器	壺	7	88	4					99
			壺(タイ産)		32	1				33		
		沖縄産 施釉陶器	碗	1						1		
				壺		1						1
				瓶		1						1
			不明	1	5	1				7		
		沖縄産 無釉陶器	壺		4	1				5		
			土器	不明		21	2		22	45		
		石器	くぼみ石					3		3		
石(砂岩)							1	1				
	合	計	16	157	15		1	23	214			
3	ナマハマ海岸 Namahama Beach	白磁	碗	1		1				2	久部良漁港東側の 海岸	
		染付	碗				1			1		
		沖縄産 施釉陶器	小碗	1						1		
			急須		1					1		
		不明	不明		5	3		1	9			
	合	計	2	6	4	1		1	14			
4	ンーダ N'da	青磁	碗	8	8	2			2	20	採集場所不明	
				皿	1					1		
				盤	1					1		
				三足香炉			1			1		
				不明			2			2		
		褐釉陶器	壺	3	35	5				43		
			壺(タイ産)		23	11				34		
		本土産磁器	不明						1	1		
		土器	不明						11	11		
石(砂岩)							1	1				
	合	計	13	66	21			15	115			
5	サムバル (島仲廃村) Sambaru (Shimanaka Haison)	青磁	碗	5	6	3				14	サンバル村跡遺跡	
				盤	1		2			3		
				瓶			1			1		
				皿か盤			1			1		
		白磁	碗		1	1				2		
			褐釉陶器	壺	4	27	1					32
			壺(タイ産)	1	21					22		
		沖縄産 施釉陶器	碗	2	2	1				5		
				壺			1					1
				急須		1						1
		沖縄産 無釉陶器	壺	1						1		
				甕		1	1					2
			不明		1	2		1	4			
		土器	不明		27	3		1	31			
		石製品	くぼみ石					1		1		
石(砂岩)							1	1				
	合	計	14	87	17		1	3	122			
6	ウヤバル廃村 Uyabaru Haison	青磁	碗	2						2	島仲村跡遺跡	
		染付	不明	1						1		
		沖縄産 施釉陶器	碗	1						1		
		合	計	4						4		
7	General	褐釉陶器	壺		1					1	採集場所不明	
総 合 計										577		

器に粗い石英粒が多く混入するのに対し、今回採集した資料では有孔虫を多く含む白砂が混入している点で異なることが判明した。本資料はその他八重山式土器及びパナリ焼の胎土とも異なるように見受けられ、今後はその他の土器についても比較観察を行い、その関連について先島諸島全域を視野に入れた検討を進めていきたい。

次に、上里遺跡採集のスコータイ産鉄絵鉢は、これまで国内でも出土例が知られていないものが与那国島に移入されているという点で、偶発的にもたらされた可能性もあるが、東南アジア及びその周辺からの特別なルートが存在した可能性も考えられ、今後近隣からの類例出土に期待したい。

また、祖納集落採取の開元通宝は、八重山諸島では石垣島崎枝赤崎貝塚から33枚と大量に得られ、石垣島嘉良嶽貝塚1点、西表島仲間第一貝塚1点、その他台湾での出土がある（高宮1995）。今回の調査で確認された資料は1点のみで開発中に発見されたものであるが、与那国島ではこれが初出であり、今後の調査により出土する可能性がある遺物として留意したい。

引用・参考文献

- 石垣市教育委員会. 1987. 『崎枝赤崎貝塚発掘調査報告書』石垣市文化財調査報告書第10号 石垣市教育委員会
- 石垣市総務部市史編集課. 2007. 『石垣市史考古ビジュアル版第1号 研究史—八重山考古学のあゆみ—』石垣市
- 伊藤慎二. 2000. 「第4章 南琉球及び東南アジア方面に共通する遺物の研究—剥離痕をもつヤコウガイ蓋について—」『琉球縄文文化の基礎的研究』未完成考古学叢書② アム・プロモーション
- 沖縄県教育委員会. 1977. 『沖縄県の遺跡分布』
- 沖縄県教育委員会. 1980. 『竹富町・与那国町の遺跡—詳細分布調査報告書—』
- 沖縄県教育委員会. 1985 a. 『与那国島トゥグル浜遺跡—与那国空港整備工事に伴う緊急発掘調査報告—』
- 沖縄県教育委員会. 1985 b. 『御嶽 御嶽信仰習俗分布調査（Ⅱ）—宮古諸島及び八重山諸島—』
- 沖縄県教育委員会. 1986. 『下田原貝塚・大泊浜貝塚—第1・2・3次発掘調査報告書—』沖縄県文化財調査報告第74集 沖縄県教育委員会
- 沖縄県教育委員会. 1990. 『沖縄県歴史の道調査報告書Ⅶ—八重山諸島の道—』
- 沖縄県教育委員会. 1994. 『ぐすく グスク分布調査報告書（Ⅲ）—八重山諸島—』
- 沖縄県教育委員会. 2000. 『空港整備予定地周辺の遺跡—与那国空港・新多良間空港・波照間空港整備予定地周辺における遺跡詳細分布調査—』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター. 2004. 『嘉田地区古墓群—嘉田地区ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書—』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター. 2006. 『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（Ⅵ）—八重山諸島編—』
- 沖縄県立埋蔵文化財センター. 2007. 『潮原古墓群—与那国空港拡張工事に係る緊急発掘調査報告—』
- 沖縄大学沖縄学生文化協会考古班. 1971年. 「与那国島の古代遺跡とその文化景観」『郷土』第10号
- 國分直一. 1972. 『南島先史時代の研究』
- 笹森儀助著・東喜望校注. 1982. 「七 与那国島巡回 八月一日～三日」『南島探検1』平凡社
- 沖縄県立博物館. 1982. 『沖縄出土の中国陶磁（上）—ジョージ H. ケア氏調査収集資料— 先島編』
- 高宮廣衛. 1995. 「開元通宝からみた先史終末期の沖縄」『王朝の考古学—大川清先生古希記念論文集』
- 田代安定. 1889. 「琉球西表島古見村ノ土器」『東京人類學會雑誌』第4巻第40号
- 田代安定. 1890. 「沖縄縣八重山列島見聞餘録」『東京人類學會雑誌』第52号 1890年
- 多和田真淳. 1960. 「琉球列島の貝塚分布と編年の概念補遺（一）」『琉球政府文化財要覧』1960年度版 琉球政府文化財保護委員会
- 知念勇. 1989. 「与那国島の遺跡」『県立博物館総合調査報告書Ⅵ—与那国島—』沖縄県立博物館
- 鳥居龍蔵. 1905. 「八重山の石器時代の住民に就て」『太陽』第11巻第5号
- 永井正文・佐野一. 1966. 「琉球・与那国島の人骨について（予報）」『日本人類学会・日本民俗学協会連合大会第19回記事』日本人類学会・日本民族学協会

- 町田市立博物館. 1998. 『南海の焼きもの』 町田市立博物館
- 三木健. 1980. 「田代安定と近代八重山」 『八重山近代民衆史』
- 与那国町教育委員会. 1986. 『慶田崎遺跡—久部良小学校体育館建設に伴う緊急発掘調査報告—』
- 与那国町教育委員会. 1988. 『与那原遺跡—個人農家の畑地改良等に伴う緊急発掘調査報告—』
- 与那国町教育委員会. 2002. 『島仲村跡遺跡—島仲地区遺跡詳細分布調査に係る調査報告書—』
- 与那国町役場. 2002. 『交響する島宇宙 日本最西端 与那国島の地名と風土』 町史第1巻